

国連生物多様性の10年日本委員会 (UNDB-J) 地域フォーラム in 東京

1. 開催概要

日時：平成31年3月18日(月) 15:00~18:00

場所：TKP 東京駅日本橋カンファレンスセンター ホール 4B
(東京都中央区八重洲 1-2-16 TGビル別館 4階)

主催：国連生物多様性の10年日本委員会 (UNDB-J)、環境省

2. プログラム

15:00~ 開会挨拶 UNDB-J 委員長代理 涌井 史郎

15:10~ オフィシャル・パートナー任命式

①グリーンウェイブの取組について

(公社)国土緑化推進機構 専務理事 沖 修司 氏

②グリーンウェイブ大使任命式

・2019ミス日本みどりの女神 藤本 麗華 氏

③グリーンウェイブオフィシャル・パートナー任命式

・アースデイいのちの森 2019 実行委員会/NPO 法人響

・SMBC 環境プログラム NPO 法人 C・C・C 富良野自然塾

・ラムサール・ネットワーク日本

15:30~ 生物多様性に関する国際的な動向について

環境省 生物多様性主流化室長 中澤 圭一

15:45~ ワークショップ -UNDBにおける日本の成果と課題を考える-

進行：IUCN-J 道家 哲平 氏

【取組発表】

・キヤノンマーケティングジャパン株式会社 (未来につなぐふるさとプロジェクト)

・NPO 法人日本エコロジスト支援協会 (命をつなぐ PROJECT)

【ワークショップ】

①グループディスカッション1 (これまでの取組、成果)

②全体共有

③グループディスカッション2 (課題、今後の取組)

④全体共有

⑤講評

18:00~ 閉会挨拶

国連生物多様性の 10 年日本委員会 (UNDB-J) 地域フォーラム in 東京ワークショップ
 ～「国連生物多様性の 10 年 (UNDB)」における日本の成果と課題を考える～
 模造紙まとめ

ディスカッション① (これまでの取組、成果)

- ・この 10 年の期間の中での参加者自身の取組を踏まえて、自身の団体や、連携している団体、身の回り (社会) の状況、生物多様性へのアプローチがどのように変化したか発言。
- ※「国連生物多様性の 10 年」(2011 年～2020 年) の全期間ではなく、これ以前からの変化やこの期間中の変化でも可。
- ・その上で、成果 (このようなことができた、このような良い変化があった等) を発言し、グループ内でまとめ。

ディスカッション② (課題、今後の取組)

- ・3 の議論を踏まえ、各グループにおいて 10 年の期間で学んだことや取組の課題、2020 年以降に自分のセクターがどのように取組を進めるべきかについて議論。
- ・また、各グループには愛知目標 (2020 年目標) や持続可能な開発目標 (SDGs) を一覧で見やすくした資料を配布。生物多様性の次期目標について、意見等があれば発言。

●グループ 1

ディスカッション①	2013 年会社の「生物多様性方針」ができた
	生物多様性の理解度、認知度に波がある。COP10 で盛り上がったが最近はまだ下火になっていると感じる。
	JATA ようやく 5～6 年前より旅行業界全体として委員会を立ち上げ活動を開始した。
	地域戦略できた→取組がすすんだ
	愛知目標があったことによる効果は大きい。
	科学的な議論が進められている
	IPBES GBO
	1973 年多様な森づくり始まる。
	耕作放棄地、農地の問題
	高齢化
	学生の参加
	教育旅行をきっかけに若い世代とのコラボ
	一般の方との関係⇄意識方面
	産業との関係強化
CSV	
ディスカッション②	CSR→CSV
	まず行動!
	説得力に欠ける
	企業の役割はやはり大きい
	生物多様性とは何か?ますます悩んだ 10 年間
	キヤノンさんより多くの事例を学びました。→旅行業界
企業を動かすものは、機関投資家による評価 (ESG 投資)	

活動に参加していない企業をいかにして巻き込むか。→SDGsの可能性
SDGsへの貢献に統合すべき段階的取組
企業の努力・開発が旅行産業に大きな影響となる→教育旅行
若い世代へのアプローチ
データ積み重ね
何をすべきか分かりやすく示す
関わり方の多様性が必要
市町村の活性化

●グループ2

ディスカッション①	条約間の協働に関心を持つようになった（よりよい保全・管理を求めて）
	湿地の生物多様性保全という意識が広がった（ラムサールとCBDがつながった）
& ディスカッション②	LGBT
	環境DNA学会の発足
	生物多様性の新しい見方
	SDGsのベースに生物多様性の目標が土台になっているウェディングケーキをよく聞くようになった
	“多様性”に市民権
	小～高校でSDGsや認証ラベルをよくみるようになった
	自然資源に関する授業の増加
	料理研究者と外来種を食べる
	地域戦略を策定する自治体が少しずつ増えている
	中高生が“生物多様性”について学びたいと問い合わせしてくるようになった
	企業から一緒に取り組みたいというオファーが増えた
	ワード「外来種」市民権
	生物多様性という言葉を見聞きする機会が増えている
	「生物多様性」というキーワードで、毎日何らかの配信を受け取っている
	異なるセクターの人々との接点ができた
	忙しくなった（会議や催しが増えた）
	生物文化多様性をアピールして、より広いセクターの人達と協働する
	海⇄森 つながり理解
	水と安全と自然は当たり前ではない。タダではない。
	地域の文化を大切に。地方の存続を。
	関心はあってもそれを活動につなげること。（忙しいとか）
	関心のない人に関心を持ってもらうこと。
	自然再生に力をいれたい。（汽水域とか生態系サービス向上）
	里山、森に比べて海岸や川の中の多様性への配慮が少ない
	幼児の頃から自然に親しむことを増やしたい。
	敬遠されがちな昆虫
	一般の人がわかり易い tool の工夫、メディアの協力

砂浜～川～山への生物多様性のつながりを大事にする。アピールをする。
4 歳から大学まで外、outdoor で学ぶ、スウェーデン
無関心層へのアプローチ
活動のテンプレート
学校の予算化
外来生物への科学的視点からの情報提供。Etc) ヒアリなどのような
認証ラベルの具体的・数値的評価→行動促進
学校教育の変更→現場を大切にする
世代ごとに分かれてしまっているグループをゆるやかに連携して活動を継続させていく。
youth を育てる
国際連携による脱“無力感”←市民の
他の目標との協働（気候変動、SDGs など）
縦割りを越える
土地の利用計画が生物多様性保全に結びついていない
竹の放置
里山保全活動は保護団体やボランティア活動が資金、労力（担い手）不足で行き詰まりを感じる。
植樹祭とか目を引くかな？
相続による森の消失
財源変化がない。乏しいまま…寄付も・・・
リニアモーター
都市の緑地 畑→分割で住宅に・・・
活動の高齢化
資金の行き詰まり
保全より再生へと流れが
太陽光パネル
4 年前からコウノトリを放鳥。福井に帰ってきてペアになっている。自然再生活動元気に
トキの脱レッドリスト？
昔…森林はお金になった。今はならない
10 年たって STARTLINE
相続で減る緑地を自治体や NGO で保全する仕組みをつくりたい
相続税が払えなくて森・山を手放す。手放さざるを得ない。
財源の確保
公が自然環境に価値がどれくらいあるかを査定する…とか？
経済や開発と対立するのではなく、win-win の関係にもっとしていく

●グループ3

ディスカッション①	○言葉の浸透
	オーガニックに加えて、エシカルという言葉がでてきた

10年前は「生物多様性」という言葉を聞いたことが無かった
「生物多様性」という言葉が浸透してきた
○メディアに取り上げられる
外来種駆除のテレビ番組ができた
外来種の名前をよく聞くようになった。
セアカゴケグモやヒアリなどの危険生物が話題になった
「生物多様性」という言葉が浸透してきた「外来種」というキーワードは広まった
ウシガエルが外来だと知った
○文化の変化
神社の杜で活動していることを否定する人が多かった
外国人の方と接する機会が増え、コミュニケーションが変化してきた
CSR活動よく聞くようになった。自然系が多いような
日本文化を説明する機会が増え、自分自身が学ぶことが変化した
「環境」と言えば「理系」のイメージから「文理どちらでも」の認識に
○人と環境の関係変化
人工林の林齢適齢に
獣害の被害が増えた
獣害被害とその対策が増えた
色々な種類の動物が増えた
手入れ行き届いていない森林が増えた
林業機械化された
耕作放棄地に行き活動するようになった
高温に耐えられる品種ができた
生物分解性の製品が安価になった
○生物多様性×地方創生（政策）
生物多様性と地方創生がつながって考えられるようになった
古民家のリノベーションが流行っている
○ライフスタイルの変化
エコバックの一般化
生物や植物に触れるきっかけが変わった。遊び → 保全
普及啓発がさかん！
ペットボトルのキャップ回収の働きができた
狩りとかの漫画が増えた
植樹イベントが増えた？
子どもの外遊びが減った
森づくりボランティアが増えた
環境イベントを良く見るようになった
親世代の人も生物多様性のことを意識するようになった。
○認証制度
FSC 浸透してきた

	もっと身近にするためには？
ディスカッション②	地域資源の価値を知る必要がある
	当たり前輸入している現状を何とかしないと！
	「外来種」に対する正しい知識を
	「これがいい」という情報にとびつきがちの人々をどうするか
	2020 年変化すべきこと、変化してはいけないこと
	数字で計れないことをどう可視化する？
	評価の課題
	「共感」を評価→目のキラキラ度を計る・・・とか？
	関わる世代の固定化
	「語り継ぐ人」と「伝承する人」がいない
	声が聞こえる、ニーズがある所しかいけない。
	世代間の文化の違いが分断を生む
	政策との連関を強化
	親世代にどう伝えるか
子どもにどう伝えるか	
現代人の行動範囲が広すぎる→身近なことが見えない	

●グループ 4

ディスカッション①	森林の持続可能な利用が広がってきている
	生物多様性保全の観点でつくった「お米」がでてきた
	社内においてボランティア募集がだんだん集まるようになった
	子どもたちに生物多様性を教えるのは難しい
	企業の経営計画・事業計画の中に「生物多様性」の言葉・観点が入ってきた
	三番瀬、生物多様性の一部で失われてきている
ディスカッション②	インストラクター増
	生活者に広がるキーワードを使うとよい
	「深める」とともに「ひろげる」が大事
	外来種への取組
	環境教育
	SDGs で頑張る
	資金
	企業に理解して実行してもらう
	継続が大事！
	田んぼの生き物を身近に感じてもらう
	SDGs の活用
	生活者目線、一般に広がるように取り組んでいく
	トップの理解
計画立てて	

●グループ5

ディスカッション① & ディスカッション②	うなぎ、寿司ネタの保全
	より多くの消費者の意識向上
	基礎知識の習得と仕事・生活での行動をどう一致させるか？
	事業と生物多様性が無関係とはいえないこと
	考え方が浸透するほど、「生物多様性」という言葉は使わなくなる。言いかえが増える
	消費行動の適正化
	知識に溜まってしまうと行動すべき or したいことリストに入っていない（知ってはいるけど無関心？）
	無関心層の行動が負のインパクトにならないようなシステム→ESG、JBIBのようなものの校歌
	市民に対してどのような具体的取り組みを訴えるか？
	企業への浸透
	企業インセンティブの強化（特に中小企業）
	SDGs とのリンクを強調（統合的課題解決）
	環境教育との連携（行政内）
	ユースの担い手育成→小・中学校など教育の中に組み込む
	継続すること
	活動自体をつづけていくこと
	高齢化
	地域の保全活動の次世代育成
	企業の協力の獲得
	NPO 活動の支援をどこまでやるか？
	どう引き継ぐ
	活動も世代も連続性をもつことで本当の主流かになる？
	外来種駆除をどこまでやるか？
	価値化のためのパートナーシップ（リソース、意味づけ、専門性）
	収益性の無いものをどう価値に変えていくか？
	発想の転換
	異質との出会い
	キーワードの浸透→行動にうつす人々の増加
	「生物多様性」言葉の認知度が少しずつ向上
	社会全体として関心は高まっている
グリーンウェイブへの問い合わせが増えた	
生物多様性が全てのことに通じることを認識	
生物多様性が自分事になってきた	
暮らしの中にエコラベルという接点がある	
FSC など認知度が上がっている	
企業、寄付から参加に社会貢献が NPO とのパートナーシップ型になった。	
企業取組が増えた	

生物多様性の活動する NPO が増えた
植樹をする NPO・企業が増えてきた
プレーヤーの高齢化
新しい人が入ってこない
部局横断的な連携ができるようになった
生物多様性に関する事業を実施する部局がかなり増えてきた
数値化などインパクトの可視化が進んだ→PDCA に
モニタリング、データの蓄積→徐々に成果！
水辺に生息する生物の変化は無い

●グループ 6

ディスカッション①	森林再生事業+生物多様性保全
	人工林再生+里山林保全
	企業の CSR+一般市民親子参加
	イベント中心+自然観察
	プラス SDGs
	ゴルフ場の跡地を森に戻そう
	植樹がイベントとして終わらないように環境プログラム
	多くの人に自然・環境の大切さを伝える
	都会のみどりをつなぐビオトープ
	公園・緑地緑を守り育てる
	生物多様性正しい理解は？
	表現をなんとなく知っている人は多くなっている気が
	エシカル、社会的に言葉が広がることで購買活動に変化？
	山、保全基金が増えている。登山道、トイレ
	問い合わせが増えた
	生物多様性を目にする機械が増えた
	参加数向上、企業、一般住民
	認知向上、概念・言葉
	コウノトリやトキといったシンボルによる市民の巻き込み易さが差が出る
	様々なセクターの意見を聞いて勉強になりました
ディスカッション②	博物館・植物園・動物園の場を活用
	TV、マスコミ、有名人 SNS 活用
	ホームページ→SNS, Facebook
	効果、影響の伝え方
	産業とのつながりを伝える
	関係する SDGs 温暖化と絡めた不朽啓発
	みつばちはち育
	身近・生活とのつながりを考える
連携取組で広げるため	

とりかかりやすいテーマを選ぶ
種子散布をテーマにしました
認知度 2008~2010 右肩上がり、2010~下がっている
関心の無い人の取組
一部の人しか取り組んでいない
生物多様性とは？
何をどこまですればいいの？
生物多様性だけでは困難
一番必要な取組はなに？ひとつ選ぶとすれば？
何が私たちにとって困るか不明
参加・協力の多様な選択肢
温暖化
分かっていないことが多い
特定外来植物の除去→在来種保全
鹿の生活圏が北上している
高齢化
バードウォッチャー、愛鳥家減少、会員減少
若者の活用が課題
AI, IoT 活用
標識調査、資格者の高齢化課題
技術の伝達
学生と現場をつなぐきっかけづくり—SNS

●ワークショップ後、意見・感想

グループ1
活発に前向きに話ができよかったです
もっとこういう場を増やすべき！！
グルーピングはジェンダー、世代バラバラで組んで欲しい
今後の業界にも活用できるヒントとなりました。今後ともよろしく願いいたします
色々取り組んでいる方々が今後どのように連携し、真の意味での生態系ネットワークを拡大できるかが課題
まず行動！！そのための準備と橋渡し、若い世代への浸透が大事。
具体の行動に結び付けて下さい
グループ2
様々な実践者と会えて良かった。COP14の話をもう少し聞きたかった
こうしたマルチセクターのワークショップ、UNDB-Jとして年二回くらいはやったほうが良いと思いました。
テーマ別にもっと時間をとってやるとさらに良かったと思う
ワークショップ苦手ですが、やってみると色々な意見・考えを聞くことができよかったです。環境省

がもっと強くなってほしいです。よろしくお願いいたします。
Part3 のワークショップやりましょう
多様な世代、職種の方の意見が聞け、大きく刺激を受けた。日々の仕事に活かしたい。東京だけでなく、地方の声も集められるとよい。
普段会えない方々の意見を聞いてよかった。
グループ 3
若者たちの熱意にまだまだ日本も大きく進化していくことが可能だと確信しました。
普段お話できない方々との交流がとても貴重で充実していた。初心者にもどう伝えていくのかももっと考えていきたい
社会人の方の話を聞いて、もっともっと具体的に考えないといけないと気づきました。普段なんとなくしか考えられていないことをたくさんの意見を聞きつつ整理できて良かったです。今後の活動につながります！
もっと多くの人と集まったらよいと思います。学校など参加してもらうのもよいのでは
今回のワークショップのような様々な立場や視点の人で考える課題などを挙げたことが新鮮で楽しかった。今回出た課題をさらに進めていけるように機会を設けたい
それぞれが持っている知識が違い、勉強になった。
様々な立場や団体の課題を知り、自分達の新たな課題が見えた
グループ 4
きいていなかったのが最初は嫌だったが参加者の方々の理解が深く、学びになった。(事前にワークショップ参加と言ってください。事前課題を提出されていますか)
SDGs 文脈での生物多様性(自然資本)の重要性を、自然・森林・農・水等の分野を越えて連携して発信していく動きをつくっていければ
様々な組織の方の話が聞けて、大変勉強になりました
様々なセクターの方々と意見交換できて有意義でした。
グループ 5
話し合いの機会を設けられたことはよかったが、なんとなく次のビジョンが見えたような見えなかったような…
同じ答えでも「どうしてそう思ったか」というアプローチが違って面白かったし、そこにヒントがあると思う。プロセスを記録してシェアして下さい！
様々な主体の現物を通じた意見がとても参考になりました。また参加させて下さい！
成果だけでなくボリュームを見せられるようハードルをもう少し低い「せいかりレー」への参加があるといいな
ワークショップはとても充実していました。一方で、席替えして若い世代とも交流できたらより効果的だと思います。
いろいろな分野の方々からご意見を伺うことができとても参考になりました。
グループ 6
課題と解決への糸口が少し整理できた
様々なステークホルダーとワークショップの形でコミュニケーションをとれたことは有意義だった
異なる反応があること、これは現実でありこれでよい
もう少し時間がほしかった
更なる連携を推進する